



随 想

タバコニスト・ウォトキンズ

——ある年の旅日記から

児 玉 実 用

ウォトキンズは好人物である。コックニー（ロンドンっ子）が自慢でいて、ロンドン嫌い。だから第二次大戦中ロンドンに空襲が始まったのをシオにウェールズの田舎町チェプストウに來た。「なぜここを選んだのか自分でも解らないが、来て見て気に入ったから住みついた」という。ノルマン公ウィリアムが築いた古城の廢墟がすぐ近くにある。ティンターン・アベイの廢墟もそ

う遠くはない。キャウエントにある古代ローマ人の遺跡にもそう距っていない。昔さすらいの詩人ワーズワースも妹と一緒にここを歩いたにちがいない。「空氣はきれいだし、近くを流れるワイ川の鱒はおいしいし、人はみな人なつっこいし、何が今更ロンドンですか」と結構満足の様子である。いつもニコニコと煙草の調合をしている。こんな田舎でも、次から次に客がくる。そして暫らく話して帰る。

ウォトキンズは煙草の調合がご自慢。「手前の合せましたのは昔のダールムに劣りません。一寸試してみてください」と氣が向くと小さな紙袋に自分のパウチから三つまみ四つまみ入れて客に持って帰らせる。パイプの趣味も大変だ。「このダンヒルは……このスリーBは……」と話しだすとそれが尽きない。まるでパイプの展示会のようにかウンターにズラリと並べる。もっともその間に來た客には「ちよっと失礼」と用は店員にまかせる。その店員がまたおもしろい。オランダから來た、主人の姪に当る二十才前後の娘っ子だが、非常に陽氣で愛想がよく、身なりよりも氣っ風で行くと

いう女性。客のあいまにはこちらのパイプ談義に入ってくる。ウォトキンズもそれを喜ぶ。こんな空氣だから、いつも土間にはのん気な客が溜っている。ピアノ調律師、中級地主、雜貨屋のおやじ、旅館の主人、通りがかりの役人等。一人が來ると一人が去るが、三、四人は始終溜って談笑している。そして互いにいつている——「結局俺達は人間の廢墟じゃなあ。あの古い城さっくりに」と。「君はいくつか」「君とおない年だ」「すると五十四か」「そうだよ。アッハッハ」といった調子。「アッハッハ」はウォトキンズの声である。するとそのうちの一人が私の耳もとでこっそりいう——「実はあいつは五十九だ」と。

そこへこの家のおかみが現れる。なかなかの美人である。ウォトキンズは紹介する——「こちらは日本からのお客さん。これが私の家内です」と。私はいう——「おはじめて。何といい御主人をお持ちだこと。あなたの心が羨しい」と。綺麗なおかみさんは嬉しそうに、少しは照れはしたものの、私の見せた日本の写真を、かなり距離をはなして、目を細めて眺めるところ、

年は相当ふけていると見た。彼女がいう——「わたしもコックニーでして。ロンドンに住まないロンドンっ子」とやっぱりそれがご自慢らしい。その間に主人が何かを紙片に書いてサッと私に手渡した。見ると

人間がしたい放題したあとは

タバコにまさるいいものはない

淋しい人には好い伴侶

独り者には好い相棒

空腹者には好い食事

悲しい人には慰め手

眠れぬ人には子守唄

寒い人には好いいろり

大空の下こんなにいい葉草が

またとこの世にありますか

と。

なる程、みんながいう「俺達は人間の廢墟だ」の意味が何だかわかる気がする。誰も彼も「したい放題したあと」の連中ばかり。それでいて完全な廢墟になり切れないで、この世に未練を持つ者ばかり。だからタバコを愛して談笑している。

フト、オランダ娘はと見ると、元気に笑いながら、“With hate but love”と書いた

メモを私のポケットにねじこんだ。嫌いつつ好きを捨てられない——そんな人間の集りが、ここチェプストウの町で私の旅心をよなく慰めた。

古城の濠は埋められ、今年の若草が空しく萌えるその中に、ピンクのデージーや黄色いバター・カップが一面に風に吹かれて咲いていた。
(大学文学部教授・英文学概論)

北山執心

久永省一

私が北山へ足を踏み入れたのは、遠い昔のことではない。北山の良さを知ってからまだ十二、三年にしかならないのであるが、なせもっと早くから、それを知らなかったか、悔む思いが近頃しきりにしている。それまでの私は、時たま出かける信州や上越の山だけを山らしい山だと考えていた。永年住みついた京の近くに、これほどたぐいまれな美にみちた山があるということに気が

がつかなかった。年が増し加わるにつれて脚も弱くなり、もう峰床山や皆子山には登れそうにもない。しかしそれでもいい、静かな谷や、心のなごむ峠が待っていてくれるから。

北山ほど繊細な髪のある山なみも珍しいであろう。京大の演習林のある芦生の辺まで、薄い和紙を皺くちやにして、引きのばしたように、複雑な構成を見せている。そしてその無数の髪の間を清冽な水が珠をころがすように流れている。季節を問わない。場所を問わない。京の町から二、三時間もかけて、北山の奥へ踏みこみさえすれば、疲れた心を安らげる静寂と透明な時間がそこにある。

三月の終りに、私の脚はひとりで北山へ向った。そして医王沢の岸辺に私は腰を下ろしていた。谷川の上に伸びてた樹々の枝には、新芽がふくらみ匂っていた。小さな岩の上に、残雪が綿帽子をかぶったようにのっていた。清らかな川底に、秋に落ちた木の実の一粒一粒が透けて見える。砂の間から泉が湧くのか、その実が揺れうごいていた。私はそのとき、Hawthorneの

“The Vision of the Fountain,”を想い出していた。その中に確か、そのような場面があったと思う。

このように静かな谷川はいくつもある。

祖父谷、長谷、松尾谷、直谷など。そしてどの谷も静かで、美しく、そしてやゝ陰湿な翳がある。陰湿という言葉を辞書で引くと、陰になって、日光がささず、湿っていることと記されている。まさしくこれは北山にびったりかなった言葉である。それは人に嫌悪をいだかせる暗さでなく、むしろ人を誘いこむ妖しい陰翳とでもいうべきものである。

魅力のあるのは谷ばかりではない。山里と山里を結びいくつもの峠が良い。昔、若狭の商人たちがこれらの峠を越えて、京に商いに来た。その峠にたどりついて、青葉を吹きわたる風に涼を入れる心地よさも格別である。無心にはほえむお地蔵さんに語りかけながら私は弁当をひろげるのである。そうした峠には、茶吞峠、魚谷峠、杉峠、狼峠、三谷峠、石仏峠などがある。

季節は一年の中、いつでもいい。春は新緑で、山も、谷も蒸せかえるようだ。夏は

たしかに歩いているときはやゝ暑い、それでも木蔭に入れば、ひんやりとした冷気が肌を包む。秋は紅葉で全山が燃え立つ。もみじは少ないが、雑木がいろいろな色彩に染め分けられて、鮮烈だ。秋が終ると、木の葉が落ち、雲が低くたれこめて、荒涼たる風景になる。それがまた人の心を誘う。冬が来て、雪が深ぶかと積もる。その雪の上を、てくてくと、黙々と、歩いている自分を私は見出すのである。北山執心、全くそうなのかもしれない。

(中学校教諭・英語)

研究者を大切に

小橋 一郎

講義の負担は、週二講時である。たとえば月曜日の第一講時に大教室といっても受講者百名そこそこの講義をし、第二講時に外国書講読でもやれば、以後その週は何の拘束もない。役職も当たらないし、教授会には出席権はあっても出席義務はない。六

畳・四畳半・三畳・ガス風呂水洗便所付鉄筋住宅の使用料が月千二百円ほどで、池や木立に囲まれたゆるい坂道を五分も歩けば研究室である。研究室は約七坪の個室。朝から晩まで本を読み、ノートを作り、原稿を書いていても、ほとんど訪れる人もない。研究会や読書会など思いのままである。夜遅くまで仕事をしていても、守衛さんが建物の入口で終夜番をしていてくれるから、安心なものである。日曜日であろうが夏休みであろうが正月であろうが、いつでも使用できる。夢の話ではない。十年足らず前まで、私は三十歳台をそんな処で過ごした。今は事情も変っているかも知れないが、国立大学の助教授の生活は、こんなものだった。もっともこれは一面のことで反面たとえば講座制の桎梏や教授・助教授・助手の身分的区別などは、自由な同志社大学においては想像も及ぶまい。また、ある余る時間があればそれだけ研究が進むというわけでもなからう。しかし時間もないのでは、研究にさしかえる。私より若い、伸び盛りの研究者が、週に四講時も五講時も、それ以上さえも講義を抱えて、そのう

え役職まであって、勉強ができないと歎いている姿には、胸が痛む。

自分の専攻分野をみて、日本の法律学界の一分野を、いったい何人の研究者で担っているのだろうと考えると、ぞっとする。一人の研究者の蹉跌が、どんなに大きな痛手であることか。研究者は、一大学のものではない。大切にしてほしいと思う。研究者が立派な成果を挙げることが、もちろん本人の能力と努力にかかるとは、も、学界の後継者の養成はまた、先輩の責務である。修士論文の指導をし、研究できる地位に就きうよう奔走し、研究会や読書会で鍛えることも、骨の折れることである。自分がそうして育てられたのだから、それだけのことは後輩に対してしなければと思うが、これもまたやってみるとなかなかうまく行かず、自分の非力をみせつけられる。

すぐれた研究がなくて、大学はありえないし、大学における教育はありえない。われわれが法人から受け取る給料は、講義に対する対価でもなければ、研究に対する対価でもない。大学であるためには、研究が

なければならず、研究者がいなければならぬのである。研究者がいつでもどこにでも無尽蔵にいると思ったら大間違いである。研究者の養成も大仕事である。大学を維持すること、大学であることは、それほどにも困難なことである。研究の遂行は、研究条件の完備を待っておれないから、苦しい条件の中でみんな頑張っている。しかしこれでよいというものではない。同志社大学の誇りは、よく研究者を抱え、活発な研究活動の場であるという、大学に本質的な誇りでなければならぬ。私学が置かれている困難な状況の下でこそ、このことが根元に据えられなければならないと思う。

(大学法学部教授・手形・小切手法)

八月十五日の思い出

— 教師 気質 —

浜 本 徹 次

昭和二十年の八月十五日も連日そうであ

るように草いきれの強い蒸し暑い日であった。

起床のやりきれない倦怠疲労感と重苦しい前途に対する絶望感が一層僕の心に押し掛かって来た。当時二十六才の予備役少尉であった私の若さと責任感が何とか、これを払い除けてくれた。早朝から何人かの兵隊を連れて紀ノ川の河原に爆破演習に行くように命令されていたのである。私の所属部隊は輜重兵連隊ではあったが小銃すら兵隊全体に行き亘っていなかった。窮余の一策として編み出されたのが伍詰の空缶に爆薬を詰め、これを炸裂させて戦車攻撃をやるうというのである。勿論キャタピラに損傷を与えることすら不可能であるから、その炸裂音が敵が驚いて天蓋をあけて身体を現わす、そこを狙撃、銃剣竹槍で突刺すというのであるからすさまじい。その訓練をするというのである。河原は一個小隊足らずの兵隊の他は人影一つなかった。河筋を通る微風と露出火薬の小さな炸裂音が僅かに元気を回復させてくれた。

その日の正午に重大放送があるから、必ず聞くように命令されていた私は、演習を

早めに切り上げ附近の小学校の校庭に整列した。ラジオは君が代の奏楽に引続き初めて聞く天皇の詔勅が流れて来たが、独特の抑揚と雑音はいくら注意して耳を傾けても全然意味を聞きとることが出来なかった。

ひとまず根来の部隊に帰るべしである。本部前の路傍で四、五人の兵隊が俯いて泣いていた。やっぱりそうだったのかと思いいながら、部隊本部に入ると血走った眼をした将校連は「まだ戦争は取ってはいないんだ。

これから米軍上陸の時に決行する斬り込みを相談するのだ。お前一体何をやっているのだ」という荒涼たる有様であった。比較的冷静らしい部隊副官は私を呼んで「今晚根来寺境内で部隊の慰問演芸をすることにしている、柳家金語楼の所に行つて事情を話し、中止方を伝達してくれないか。」と依頼された。

早速、根来寺門前の西坂本の小旅館を訪れた。金語楼は真昼間から、名前を忘れたが高名の浪速節語り等と自棄酒を飲んでゐた。恐ろしく真剣な顔で「戦争に取けたつていうじゃありませんか。今まで何の情報も伝えないなんて失礼じゃありませんか。

私しや佐官待遇の軍属、お前さんより偉いんだ。どうしてくれるんですよ。あつしは人を笑わしてはきたが、これでも一生懸命やって来たんだ。戦争に取けたんじやおしまいだ。落語なんかやめた。どこか山奥に行つて坊主にでもなりますよ。」と泣きながら訴えるのだった。私は思わずどなた。「泣くな金語楼!!」金語楼はきよんととして私を見た。「戦争は稀には引き分けといったこともあるが、大体どちらかが負け、どちらかが勝つ。勝つたから国家民族が永久に栄えるわけのものではない。自惚れてかえつて滅びてしまうこともあるし、取つてかえつて奮起して興隆することがある。要は戦後のあり方如何にあると思う。戦後の国民にとって必要なものは何であろうか。最重要なものとは失望した国民を慰める健全な娯楽ではないだろうか。落語をやるなんていわないで大いに頑張つて下さい。」私は熱意を込めて語つた。金語楼は生意気な少尉めと思つたであろうが、きよんととしてこつくりと頷いてくれた。

あれから四分の一世紀が過ぎてしまつた。金語楼も年をとつた。恐らく多忙の彼

はこんな終戦の事なんか忘れてしまつたことであろう。テレビ等の金語楼の活躍を見るにつけ、生徒や子供達に金語楼を落語家として、喜劇俳優として思いとどまらせたのはこの僕だ。私の弟子だなどと話すことがある。これも教師氣質の一端かもしれない。僅か十分程度の出逢いであつたが私にとって忘れられない思い出の一つである。

それにつけても大戦末期宮崎海岸等の予想戦場には数軒正面毎に一個師団宛を配置し、膨大な労働力を投じて洞窟陣地を準備した日本陸軍がよくも本土決戦を思いとどまつたものだと思う。有機的近代化した日本での本土防衛は不可能なのだという事が頑迷な軍部内部ですら識者にはわかつていたのだ。

あれだけの犠牲を払つた第二次大戦の経験があるにもかかわらず、現在の四次防の膨大予算が如何にむないものかわからないのだろうか。国土防衛とは一体何なのか今こそ真剣に考えなければならぬと痛感するものである。

京を離れて

荒川民助

八年間住みなれた京都の九条山を離れて大阪近郊の小都市高槻に移って一年になろうとしている。木一本見当らない田んぼの中の造成地の住まいは、周囲を色とりどりの緑に囲まれ、新緑の頃には緑が燃えるように輝き、昔の英国の民話にでてくるフェアリー（妖精）が緑の衣をまとって木々の間から踊り出てくるのではないかと幻覚するばかりの深々とした緑の世界と、木々の梢の頂きに光る木の葉ごしにのぞく真青な空と四季折々の小鳥たちのさえずりに朝夕囲まれて暮してきた我々一家にとって、急転直下の変わりようで、当初は心の中にぽっかりと大きな空洞ができたような落胆を覚えたものである。

わが家のように自然に恵まれた環境から対照的な環境に移り住んだ者にとっては一層、美しい自然への憧れを感じるものなのかもしれないが、人間の眼にいつも緑が映

っているということは精神のうるおいと安らぎを与えるものであるらしい。自然界の色彩というものは、人間の魂をいやすような巧みなとり合わせで創造されているといふことが緑の世界から離れてみて実感としてわかったような気がする。

京都に在住している間は、京都は氣候がわるいの、京都人は性に合わないの、と不満に思うこともあったが、やはり本当の京都のよさは離れてみて初めてわかるものと京育ちの妻は語る。草木についてもそこに生えているのが当然とばかり無頓着であった私も、こういう殺風景な環境におかれると必然的に庭に緑がほしいと思うようになり、生まれて初めて庭木について関心を寄せるようになった。山紫水明の地に緑がなくなつた分だけ草木に対する愛着が鮮明に芽生えたことは私にとって収穫であった。緑少ないこの地では雑草一本も粗末にできない気分になるから不思議である。庭木への関心などは老夫婦の楽しみ位に思っていたが、今では我々もその仲間入りしたような気分になることもあり、そんな折、束の間の小さな幸せを感じるが、次の瞬間

には住む家のない人達のこと、公害で破壊されていく日本の自然と人間のことが頭をかすめ、それと同時に、かつて訪れたヨーロッパの国々の無傷な美しい自然を思い比べて、日本は国をあげてもっと本気で環境保護対策と都市計画をせねば、近い将来、この狭い国土が荒廃と化すのではないかとこの危惧をいだく。日本の未来を受けつぐ次の世代に、我々大人の手で荒し尽された国土を残すことは、心ない恥ずべき仕事であることを真剣に考えるべき時が来ていると思う。

荒廢した自然の中に生活する人間は心身共に不健全になると思うし、それと同時に英文学に語りつがれた緑の妖精の世界はいつの時代にも人間の心のふるさとであり、願望であり、緑から離れては暮せない人間と自然の深い絆を素朴に表わしたものではなからうか。自然破壊は人間の破壊にもつながることを悟れない国民は、いつの日かその国を亡ぼすことになるのではないかと考える。自然に恵まれない地に住む者の心境として、切実にこの感を深くする今日この頃である。

（高等学校教諭・英語）